

フレデリック・レイトン『燃え上がる6月』1895年

曲目解説

Après un rêve

夢のあとに

Gabriel Fauré（1845–1924）　ガブリエル・フォーレ

曲目解説

Après un rêve 夢のあとに

Après un rêve, Op. 7 No. 1 ／ 夢のあとに 作品7の1

Gabriel Fauré（1845–1924） ガブリエル・フォーレ

作曲	1877年ごろ（1878年に出版）
原曲の編成	歌とピアノ（歌曲。チェロやヴァイオリン、フルートの独奏曲としてもよく演奏される）
詩	作者不明のイタリア（トスカーナ）の詩を、ロマン・ビュシーヌがフランス語に自由に訳したもの
調・拍子	ハ短調・4分の3拍子・Andantino（歩くより少しゆっくり）
この楽譜	OpenScore Lieder（CC0）の歌の旋律から入力し、IMSLP #24047 の楽譜（原調ハ短調）と照合

作曲者

ガブリエル・フォーレは、南フランスのパミエに生まれました。9歳でパリの宗教音楽の学校に入り、そこでサン＝サーンスにピアノを習って、生涯の友となりました。長くマドレーヌ教会のオルガニストを務め、のちにパリ音楽院の院長となって、ラヴェルらを育てています。

フォーレは生涯に100曲を超える歌曲を書き、フランス歌曲（メロディ）の第一人者とされています。『夢のあとに』は、その中でもとくに早い時期の作品で、いちばんよく知られた一曲です。

曲の成り立ち

1870年代、30歳前後のフォーレが書いた歌曲です。のちに『3つの歌』作品7の第1曲としてまとめられました（作品番号は、1890年代になってから付けられたものです）。

詩は、作者の分からないイタリアの詩を、歌手で、サン＝サーンスとともに国民音楽協会を興したロマン・ビュシーヌが、フランス語に自由に訳したものです。この楽譜のもとになった版にも、フランス語の下にイタリア語の詞が添えられ、「トスカーナの詩」と書かれています。

夢の中で、恋しい人が輝くように現れ、手を取り合って光のほうへ昇っていく。けれども目が覚めると、その夢は消えてしまう。「夜よ、もう一度あの幻を返しておくれ」と願う――そういう内容の詩です。

曲調と聴きどころ

ピアノは、8分音符の静かな和音を、最初から最後までほとんど休まず刻み続けます。その上を、歌がゆっくり大きな弧を描いて進みます。ところどころに入る3連符が、言葉の抑揚のように旋律を揺らし、夢の中を漂うような浮遊感を生みます。

前半は弱く静かに夢を語り、後半「空が開き、まだ見ぬ輝きが見える」あたりから少しずつ高まって、「ああ！（Hélas!）」で最も高く強い所に達します。目覚めの悲しみのあと、「戻っておいで、夜よ」ともう一度高まり、最後は静かにハ短調へ帰っていきます。

歌詞のない楽器で吹くときも、言葉の流れを思い浮かべると、どこで息を吸い、どこへ向かって歌うかが見えてきます。とくに句の終わりの長い音は、急いで切らず、ピアノの和音の中に溶かすように終えてください。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1	ピアノの前奏。ハ短調の和音を、8分音符で弱く静かに刻む
2〜8	「あなたの面影に誘われた眠りの中で」。旋律がソ・ド・レ・ミ♭と上がり、ゆっくり下りてくる
9〜15	「あなたの瞳はいっそう優しく」。3連符を交えて歌い、明るい変ホ長調の響きで一区切り
16	ピアノだけの短い間奏
17〜23	冒頭の旋律が戻る。「あなたは私を呼び、私は地上を離れて、あなたと光のほうへ」
24〜30	「空は雲を開き、まだ見ぬ輝きが見えた」。cresc. poco a poco（少しずつ強く）で高まっていく
31〜38	山場。「ああ！」と f で高いファに上り、目覚めの悲しみへ下りていく。「夜よ、あなたを呼ぶ。幻を返しておくれ」
38〜46	「戻っておいで、輝く夜よ、神秘の夜よ」。もう一度高まって（41小節 f）、p・pp へ静まる
47〜48	最後は低いドでハ短調に帰り、ピアノの和音で閉じる

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　ハ短調

ドを主音（中心の音）とする短調で、調号は♭が3つ（シ・ミ・ラ）。
途中で変ホ長調などの明るい響きに移ろい、夢の場面の明るさと、目覚めの陰りが入れ替わります。

拍子　4分の3拍子

1小節に4分音符が3つ。ピアノは1拍に8分音符2つずつ、1小節に6つの和音を刻みます。
ワルツのように弾むことはなく、静かに平らに流れる3拍子です。

3連符と8分音符

旋律には1拍を3つに分ける3連符がよく出てきますが、ピアノは1拍を2つに分けて刻み続けます
（2つと3つが重なる）。伴奏に引っぱられず、3連符は3つの音を均等に、なめらかに吹くと、
旋律がふわりと浮かびます。

篠笛の楽譜と調について

同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	ハ短調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。伴奏（A＝440Hz）と合わせるときは、一 がおよそドの笛（目安：八本調子前後）を使います。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。ト短調（原曲より完全5度上）、チューナーの基準A＝436Hz（全体を25セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026